

反戦・反核・三里塚闘争への敵対を深める 「本部」反動分子



82. 8. 18

No. 1124

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）品三（22）七二〇七

動労本部が38回全国大会 方針（案）を批判する（最終回）

来たる八月二五日～二八日の四日間、北海道において開かれる動労「本部」第三八回定期全国大会は、極めて重要な問題を動労組合員につきつけるものとなった。すなわち、動労の闘う伝統を完全になげすめて、当局の忠実な御用組合に第二鉄労への道へ公然とカジをきるのか、それとも、いかに厳くとも現下の臨調・行革攻撃・軍事大国化・戦争体制づくりーそのための二大中心軸の攻撃に（①三里塚二期着工攻撃、と、②国鉄労働運動解体攻撃）に対し、四〇万国鉄労働者の怒りの最先頭に立って闘いを組織していくのか。道ははっきりと二つに分岐している。中途半端な道はない。全員が、一人ひとりが選択を迫られている。進むのか、退くのか。起って闘うのか、座して屈従と妥協の道に身を沈めるのか。

二つに一つの、この選択を前に、ついに動労「本部」革マル反動分子はあらゆるベールをふりすてて、はっきりと本性をあらわした。彼らは、どんずまりの危機につき当てもなく支配者へその典型としての国鉄危機に對して「一緒に頑張って危機打開」再建の道を選ぶ、そのためには労働者の権利だの要求だの言うべきではない、がまんすべきだ。国鉄（＝企業＝国家）あつての労働者（＝国民）だ。守ろう。働こう。闘うな。」の路線をついにはっきりとかかげた。「本部」革マル反動分子の作成した「大会方針案」の基調・結論はこの一語に尽きる。

前4回にわたって指摘してきた「方針案」批判の最後に、彼らの反動的な本性のよくにじみでた「反戦・反核闘争敵対、三里塚・ジェット闘争敵対」方針をあばき弾劾する。

露骨な大衆蔑視で 反戦・反核の闘いに敵対

「方針案」の「運動の基調」「具体策」の項において、彼らは、反戦・反核闘争について次のような反動的な見解を露骨な大衆蔑視の感情もまじえて述べている。すなわち、

- ①今くり開けられている反戦・反核の運動は、単なる核兵器への危機感や平和を願う小市民的な「草の根」運動として展開されているものにすぎず、階級性を後景化させたものである。
- ②日本の反核運動は、核軍縮、核兵器禁止、被爆者救援にわい少化されている。
- ③反戦闘争は階級闘争であり、その主体はあくまでも労働者階級でなければならぬ。放棄されている労働組合の反戦・平和の闘いの組織化こそ重要である。

動労「本部」革マル反動分子の「反戦・反核」「方針」のなんたる反動性！戦争とりわけ「核」に対するなんとおぞましい感性であることか！「核兵器への危機感」「平和を願う運動」を完

全に否定する動労「本部」革マル反動分子。

「被爆者を救援するな」とまで言う彼ら。

「労働者主体・・・」を口実に現実の 闘争をことごとく放棄し、敵対

彼らが「反戦闘争の主体はあくまでも労働者階級でなければならない」と聞いた風な「お説教」をたれるのも、決して自らが階級闘争としての反戦闘争を労働者階級としての責任をかけて、広範な諸階級の先頭に立って闘いぬこう、という実践的決意からではサラサラない。動労「本部」革マル反動分子が「労働者（あるいは労働組合）主体論」を声高に叫ぶときは、十中八、九まちがいく、自らの闘争放棄の現実をゴマカス目的の場合か、あるいは、さもなくば現実に闘われている様々な闘いに敵対し、破壊・介入を策する時と大体相場が決まっている。

現に、労働者階級をも含むわけて広範な人民の共闘をもって闘われている反戦・反核闘争の最も中軸である三里塚軍事空港建設阻止闘争やそれにしっかりと結合して闘いぬかれている関西新国際空港、北海道伊達火力発電、東北女川原子力発

（裏へ続く）